

# ガネフォという大会を知って

玄 洋 社 研 究  
浦 辺 登 (62 歳)  
(ガネフォ会)

ガネフォというスポーツ大会のことを知ったのは、玉利齋（たまり・ひとし）氏からだった。玉利氏は日本ボディビル連盟の会長であり、あの三島由紀夫にボディビルをレッスンした方でもあった。

さらに、氏は日本プロスポーツ協会の理事でもあり、当時、私は事務局長として氏の下で指示を受ける立場にあった。折に触れ、三島由紀夫の事、アジア主義などについて話を聞いていた。

玉利氏の父・三之助は三島由紀夫、八田一朗（元参議院議員）に剣道の稽古をつけた方だった。戦前は、天覧試合にも出場する剣士であり、柔道の牛嶋辰熊（力道山とのプロレス対決で知られる木村政彦の師匠）とも親しく交際があったと聞き及んでいる。玉利氏との会話からは歴史上の人々が近い関係として次々に登場した。とどめは、玉利氏の祖父・喜造（鹿児島出身、日本の農学博士第一号）が西郷隆盛と関係があったことだった。

そんな玉利氏の話を楽しむにしていたが、「ガネホ（氏はガネホと発音される）の問題があって、インドネシアは東京オリンピックに参加できなかったのですよ」と語られる。氏の話を書くとき、いつものように、私はノート片手にメモをとっていた。「ガネホ」と聞いたままを書きながら、スカルノ、ウェイト・リグティング、玄洋社、アジア主義、独立運動などの単語が並ぶ。氏は、質問をすれば丁寧に回答してくれるのは知っている。しかし、話の流れを邪魔したくないので、いつも聞くだけにしていた。およそ一時間半、まるで、一対一で講義を受けているかのようだった。

時に、「頭山立國という男は凄い男だよ、君。俺より若いが見直したというか、”こりゃ、この男には、かなわねえ” と思ったよ。さすが、玄洋社の頭山満の孫だよ・・・」

ガネフォ選手団長としてインドネシアに向かった頭山立國氏のことを語られる。

この玉利齋氏の話から、ガネフォというスポーツ大会がインドネシアで開催されたことを知った。これが機縁となって、少しずつ、ガネフォについて調べていった。1963年（昭和38）に開催されたスポーツ大会を知るには、国会図書館しかない。スポーツ大会といっても、昭和31年（1956）生まれの私の記

憶では、白黒テレビの画面の中の1964年の東京オリンピックしかない。ガネフォとは？ 皆目見当がつかなかった。

しかし、さらに、資料が少ない。いや、少なすぎた。

第一、日本とインドネシアとが、いつから、どのような関係であったのかも具体的に分かっていない。まずは、日本とインドネシアとの関係史だが、長い年月、インドネシアはオランダの植民地として支配下にあった。そうなれば、日蘭関係400年の歴史も知らなければならない。文献資料の読み込みに没頭した。

国会図書館の資料検索をしても資料は少ない。出てきても、スカルノ大統領を批判する記事ばかり。話にもならない。

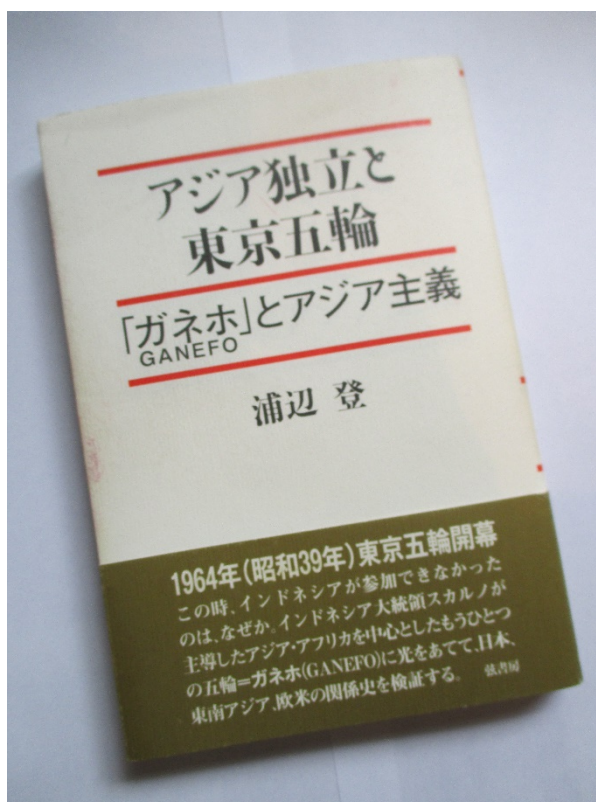
インドネシア協会に出向き、半世紀前の会報誌を読み込んでいった。協会事務局の方も、変わった奴が飛び込んできたと思ったことだろう。真夏、資料をコピーすることに血相を変えていたからだ。それでも、紐解けばホコリがたつ、黄色く変色した機関紙の束を用意していただいたことは、感謝しかない。

同時並行でインドネシア関連の文献を読み込む。インドネシア独立運動の最中、生命を落とした日本人のなんと多い事。胸が痛んだ。大東亜共栄圏と言いながら、その大東亜会議に招かれなかったスカルノの胸中はいかばかりであったか。頭山満の門下生を自認するアジア主義者たちが、インドネシア独立運動に身を投じたこと。実に驚くばかりだった。

そうこうするうち、『アジア独立と東京五輪』を上梓することができた。歴史の襞に押し込められた事実を記録したいという願いは達成できた。クサビを打ち込むことはできたと思った。不完全であることは承知の上、批判覚悟で。

2013年2月に刊行した『アジア独立と東京五輪』だったが、1年ほどして、「懐かしのガネフォ」という記念誌が届いた。容易に見つからなかったガネフォの写真がふんだんに掲載されている。早速、送っていただいた村上順三氏に連絡を入れた。

そして、毎年開催されている「ガネフォ会」に招いていただいたのだった。もう、これは、偶然にしては大きな驚き。ただただ、感謝しかない。



2017年7月、『玄洋社とは何者か』を上梓できた。当然、ガネフォ水球チームについての新しいエピソードも盛り込んだ。アジアのため、インドネシアのため、スカルノのため、日本のため、全てを犠牲にした方々がおられることを、さらに知って欲しかった。ガネフォという大会は、日本人の誇りだと。ガネフォという大会を知って、私達日本人は、歴史に何か大きな忘れ物をしてきたのではないか。半世紀以上も前の出来事とはいえ、これは、次の世代に語り継ぐべき事実だと。

2020年、東京で再びオリンピックが開催される。この時が、絶好の機会。幾度も幾度も、文字にし、場を設けて語ることが文筆の世界に身を置く私の使命と考えている。

なお、2019年2月、私が所属する「福岡地方史研究会」例会で「福岡県民なら知っておきたい1964東京オリンピック」として研究発表。内容については、「幻のオリンピック ガネフォ」として研究会会報誌57号に寄稿しました。

以上



2015年2月 撮影